

宝塚市自立支援協議会 専門部会 「こども部会」
平成 30 年度 活動結果報告

- I. 開催日時
- | | | | |
|-------|-----------------------|-------------|----------|
| 第 1 回 | 平成 30 年 6 月 14 日 (木) | 13:30~15:30 | 出席者 23 名 |
| 第 2 回 | 平成 30 年 8 月 9 日 (木) | 13:30~15:30 | 出席者 18 名 |
| 第 3 回 | 平成 30 年 10 月 11 日 (木) | 13:30~15:30 | 出席者 17 名 |
| 第 4 回 | 平成 30 年 12 月 13 日 (木) | 13:30~15:30 | 出席者 17 名 |
| 第 5 回 | 平成 31 年 2 月 14 日 (木) | 13:30~15:30 | 出席者 19 名 |

II. 要旨

第 1 回こども部会 (H30.6.14)

1. ・今年度の常任委員の自己紹介
・今年度のこども部会 部会長および副部会長が拍手で承認された。

2. 障害福祉課より (自立支援協議会のしくみ)

自立支援協議会は地域の課題を話し合い、話し合ったことをまた地域へ返していく流れを持つ協議会である。市へ要望していく会ではなく、懇話会でもない。テーマに基づく 4 つの専門部会、こども部会・しごと部会・けんり・くらし部会 (地域移行 G r ・地域生活 G r) がある。4 専門部会の話をも横断的に共有するのが定例会で、委員の所属する長で構成されるのが半年に 1 度開催される全体会である。全体会は公開である。各部会の事務局に市が委託する相談支援事業所が入っている。相談支援事業所は色々なケースを知っているので、話題提供してもらいたい。委員の皆さんには活発なご意見をよろしく願いたい。

前年度 3 月の全体会では、電動車いすを使って生活されている当事者の暮らしぶりをビデオで紹介した。4 専門部会の取り組みを説明した。こども部会：たからっ子ノート啓発リーフレット作成した。たからっ子ノート活用ガイドブックのワーキンググループを立ち上げ、ガイドブックの作成を始めている。きょうだい児支援について小グループに分かれて話し合った。

しごと部会：福祉事業所や会社における合理的配慮についての話し合い、福祉事業所合同説明会 (H29.9.23) 報告、USJ による講演会 (H30.1.30) 障がい者雇用 (インクルーシブ雇用) の取り組み、共同受注窓口 (グッドジョブ) の設置検討について

けんり・くらし部会 (地域生活 G r) : 知的障害者の高齢化問題、医療的ケアを行えるヘルパーの不足 (資格取得が高額)、精神障害者のための社会資源紹介マップの作成

けんり・くらし部会 (地域移行 G r) : 精神科病院のケースワーカーを招き、長期入院からの退院支援の取り組みを聞く。

今年度から相談支援事業所の委託を 3 か所から 5 か所に増やした。

3. 「たからっ子ノート」活用ガイドブック ワーキンググループ報告

○先生方が「たからっ子ノート」に書き込みやすいように取扱い説明書のような活用ガイドブックを、ワーキンググループ (保護者・事業所・先生の立場のメンバー) で作成している。同時に、宝塚市のホームページから入力できる「たからっ子ノート」のページを入力中に形式が崩れないようにしたり、チェックボックス様式にするなど改訂している。この 1 年で完成させる見通し。

4. きょうだい児支援について

○障害児に手がかかり、きょうだい児は寂しい思いをする。以前こども部会で取ったアンケート結果よりきょうだい児支援が必要と分かり、ファミリーユ (きょうだい児支援のグループ) と連携して講演会の開催に取り組みたいと考えている。きょうだい児の SOS に気付いていない保護者もいるのではないかと。きょうだい児の気持ちを知らせてもらえる内容にしたい。

5. 放課後等デイサービスの現状について

- 放課後等デイサービスが増え、特別支援学校にデイの送迎車が並ぶようになった。終わりの会があるのにデイの車が来ている等、学校側で問題になっている点を挙げてほしい。放デイの内容も問われるようになっていく。
- 色々なデイがあり、学校側とどう連携するかが課題である。利用計画を読むことや、相談支援と話をすることで情報を聞くことができる。子どもがデイに行きたくないと言ったら、子どもやデイにどのように伝えていけばいいか難しい。
- 現在は学校にサービス利用計画を送っていない。
- 本来は全員（先生・デイ・相談支援）で集まった方がよい。サービス利用計画は保護者を通じて先生に見せるのがよいと思う。特別支援学校は相談支援の担当者を把握している。
- 子どもが学校に行きたくないと言った時、学校側はプランを持っていけば相談支援事業所に連絡しやすい。
- 障害児は一人で外へ遊びに行けない。デイができたおかげで友だちと会える空間ができた。デイが子どもの居場所となってほしいが、親が楽だからデイの日数を増やしたいという時は、相談支援事業所は『こんなに増やして子どもさんが疲れませんか?』と保護者に投げかけてほしい。
- 学校側は、プランは個人情報になるので、郵送でなく手渡ししてほしい。
- デイに行っていることを学校に内緒にしている親もいる。
- 相談支援事業所が「学校の先生にもお渡しください」と保護者にプランを渡すのがいいと思う。

6. 通学保障

- 親が風邪をひくと知的障害の子は学校に行けない現実がある。
- 以前、週2~3回学校ボランティアに頼み通学保障をしたことがあった。ここ1年はボランティアに頼んだ事例がない。
- 宝塚では診断書があればヘルパーさんを頼めるが、現実に来てくれるヘルパーさんがいるかどうか難しい。

第2回こども部会 (H30.8.9)

1. 放課後等デイサービスの現状について

- 学校は子どもがどの放デイに行っているのか全部は把握しきれていない。デイのお迎えに来られている方に対しても、車も普通の車だと本当にデイの職員なのかどうか、引き渡しが不安になる時がある。
- 保護者の代わりにデイの職員が迎えに来るのか。
- デイの方は何軒か回ると時間通りには来られないこともあり、『本当に今日来るのか?』と教員は不安になる。親しくなれば話せると思うが、今は児童を引き渡して終わってしまっている。一番困るのは4月。新しい先生は慣れていない。そもそも先生はあまりデイのことを知らない。以前はデイが少なかったが、今は増えている。車が数珠つなぎ状態で駐車場が混み合い危険な時もある。問題点は二つ。一つ目はデイが増えわからなくなってきたこと。二つ目は送迎の時間が重なり、渋滞し、子どもの情報交換ができなくなったこと。急激に増えた放デイに学校は対応できていない。
- こども部会でデイの送迎時の指針を決めて教育委員会にお願いし、学校へお知らせしてくれたらいいのだが。
- 児童発達支援をしているが、保育園とは送迎時のことを確認し合っている。
- やはり〇〇デイの△△さんが迎えに来る、といった保育園との確認は必要。
- 保育園に連絡がつかなければ引き渡さないのか。
- 保育園には迎えの人が変わる時は必ず連絡を入れたいといけない。
- 保護者はデイのどなたが迎えに行くかまでは知らない。
- 相談支援事業所ではサービス等利用計画案を作成している。受給者証を発行するために、利用者全

員にプランを作り市役所に提出している。利用者とその家族とにどういった事業所を利用したいかお話を伺い、プランを書いている。相談支援事業所によって、放デイの事業所の住所、電話番号を書いているプランもあれば、書いていないプランもある。緊急性が高い場合は担任の先生とコンタクトをとり連携している。

- 昨年度聞いたところでは、プラン（サービス等利用計画）を学校に渡すのは難しいという意見が多かった。が、このプランを学校に渡せば、事業所の住所や電話番号がわかるので、連携がうまくできるのではないかと。相談支援事業所の手間が少し増えるが。
- 9か所の相談支援事業所からプランがバラバラで来たら大変なことになる。受け取る者が1人でないと統括しきれない。
- 保護者がプランを2枚受け取り、1枚を先生に渡したらいい。
- 子どもの誕生日が更新月である。プラン変更を頻繁にする利用者もいる。
- 委員：プランを作った時とは違う事業所に変わる利用者もいる。
- 支援級だと先生と長く話せるが、懇談では時間制限がありゆっくり話せない。通常級から放デイに行っている子の中には先生に言っていない子もいる。
- 育成会（学童）から放デイへ行っている子もいて、先生も知らないことがある。
- 各学校に1~2人のコーディネーターがいて、特別支援学級の担任又は通常級の担任である。支援の必要な子の会議を定期的に開いている。場合によっては専門家（教育支援課、SSW等）につないでいる。個別支援計画を立てたり、市内の巡回相談、通級指導の申し込みをしている。放デイの把握は、実はコーディネーターもできていない。かつて私が小学校で担任をしていた時、靴箱で挨拶をしたら校門のところで迎えの人と一緒に帰っていった子がいたが、それが放デイの迎えの職員だった。これから引き渡しのルール作りをしていかなければいけない。外部との連携もよいと考えるが、現況は外部との連絡は管理職が行っている。
- 教頭先生を通して担任の先生とやりとりをした事例があった。
- 教頭先生を通してでも担任の先生と話せばよい。放デイと学校はつながっている方がよい。
- ある学校では学校全体の児童数も多く（1300人）、支援級の子の人数も多い（40人）ので、担任1人だけでは連携は難しい。中規模校（2クラス）ではコーディネーターは兼務となり、それはそれで負担となる。
- 今後、子ども1人の放デイの利用量が増えると予測されるし、通常級の発達障害児の放デイ利用は増えるだろう。
- 保護者から担任に言っていくのが簡潔なルートでよいと思う。
- 相談支援の仕事が増えるが、プランに放デイの電話番号を載せるといい。
- コーディネーター連絡会・宝特研・校園長会に報告しておかないといけない。
- 相談支援事業所は必要時には放デイと報告をし合うことになっている。
- 保護者をもっと連れ去りなどの危機感を持ってほしい。支援級の親は予定表や放デイの連絡先を学校に出した方がよい。
- 引き渡し簿を作ったら確認できる。
- 行動障害があるお子さんについて連絡帳を一つにすることを提案した。
- 通常級では、先生も放デイを塾と同様に家庭責任だととらえる傾向がある。
- 4月に通所する子の保護者に連絡簿を書いてもらっている。
- 特別支援学校では放デイの情報を書き込む用紙がある。
- その用紙に『放課後等デイサービスに行っていますか?』の欄を作れたらいい。
- 今後は発達障害の児童が増えてくるであろう。通常級の担任の先生にも知っておいてほしい。4月第1回目の保護者と先生の話し合いで、放デイのことを保護者から伝えることが大事である
- こやの里特別支援学校での用紙を見せてもらい、独自の用紙を作ってはどうか。
- 相談支援はプランを学校の先生へ渡してもらおうと保護者にも言うが、学校もまたプランがほしいということ保護者に伝えてほしい。
- 「○○放デイへ行っていて、お迎えは△△さん」とわかる用紙を提案していく。
- 医療的ケア児の放デイが市内一つもない。他市へ遠距離通所している。宝塚市では第V期計画でH32

- 年までに1か所作ることを目標としている。こども部会と連携して協議することになっている。
- 知的の子のデイは増えたが、医ケア児に対応できる放デイがない。
 - 医ケア児は、数少ない入浴できるデイを利用している。児も者も医療的ケアができる事業所は少ない。
 - 学校と福祉がうまく連携できた事例：保護者の働きかけがあり、先生・放デイ・相談支援事業所の四者で密に連携できたケース。定期的（1学期に1回）に情報交換ができた。先生も熱心で、目標について学校でも声かけをしてくれ、家族も取り組んでくれた。もう一例は幼稚園児で、相談支援事業所が働きかけ、児童発達支援事業所と園との四者で話し合い、園の教育方針に沿って児童発達で療育を行った。通常級の子どもでも支援会議を開いた。今後も関係機関と情報の共有を図りたい。

2. きょうだい児支援

- こども部会主催の講演会を開催する件で、「NPO法人 しぶたね」に講演依頼を行い、了承された。3学期の1～2月に予定。周知の方法や当日の段取り等について、次回考えていく。

3. 全体会での講演会

委員から講師について案が挙がった。

第3回こども部会 (H30.10.11)

1. きょうだい児支援について

- こども部会で、きょうだい児支援の必要性についての講演会を企画し進めている。
平成31年1月18日（金）、場所は中央公民館ホール。講師は「NPO法人しぶたね」理事長 清田久悠氏。その後、宝塚で活動されているきょうだいの会の代表の方に活動報告などをして頂く。今、チラシ作りと講演の題目を検討している。チラシの配布先として、小・中学校全生徒と、可能なら保育園、幼稚園も考えている。裏方として、こども部会の委員にもお願いすることがあるかと思う。チラシ配布に関しては、教育委員会の協力をお願いしたい。また、会場準備は、前日の18時～横断幕等大きなものを設置する為、数名お手伝い頂きたい。受付や司会は、部会長・副部会長および事務局で行う。

2. 放課後等デイサービスの現状について

- 担任の先生が、デイの方に子どもを引き継ぐ際にどこに引き継いだか分からないというケースがあり、それは問題ではないかという話となった。上手く情報を伝えられないかと、特別支援学校で現在使用されているものをお借りし、こども部会でたたき台を作成した。
- 年度に必ず記入してもらおう。入力して管理し、事業所が変わるたびに更新していく。
家庭訪問、面談、懇談時、年3回くらいのタイミングで必ず聞き取っている。
- 一般の学校の面談は年に何回ですか。
- 2.3回です。
- 特別支援学校では担任が管理している。更に連絡帳に毎日利用する事業所を記入する。
- 一般の小学校での使用だが、保育所ではどうか。
- 保育所では、このような用紙はないが、保護者以外の方が迎えに来る場合は必ずどなたが来るか事前に連絡して頂いてから引き渡している。
- 引き渡しは問題ないと思うが、就学前でもこのような支援がわかるものがあったら便利だと思う。
児童発達支援事業所を何か所も利用されている方もいる。
- 療育内容でいくつか利用している方はいる。保護者の中にも療育を受けていることを伏せている方もいるので、提出をお願いすることは難しいかもしれない。
- 親もまだ、受け入れが難しい時期かも知れない。保育所とデイで小学校へ向けて話ができればいい。
- 宝特研でこの話をしてもらえないか。
- 可能である。療育と学校とが連携をとるのは必要。コーディネーター会議もある。
- 今回、運動会が台風の影響で日程が変わり、放デイとの連携に混乱が起きた。

- 宝特研の場で、市内で使う用紙の作成を進めていきたい。内容についても精査したい。障害者手帳情報や受給者証情報は必要か。
- 例えば放課後等デイサービスの送迎場所の記載を入れることも検討した方が良いという意見もあるかと思う。
- 学校によって決まっているのか。
- 家に帰ってからタクシーで放デイへ行く子どももいる。
- 友達に見られたくないから、学校から出たところに迎えに来てもらうというパターンもあると聞いている。時間によっては自宅に一回帰ることもある。
- 特別支援学校は問題ないか。
- 学校迎えやバス停迎え、母が迎えに来て送迎ということもある。様々なパターンがあり、間違いないようにしている。独自の様式の物に記載している。
- 迎えの場所という欄があればいい。
- 学校・自宅・その他として記載できたら良い。
- 親の立場で考えると、障害者手帳、受給者情報については要らないのではないか。
- 書きたくないという方もいる。手帳を持っていることを学校が把握していない場合もある。
- このような内容は相談支援で計画に書いてあることで、知らない方には関係のないこと。
- たからっ子ノートには記載するページもある。
- 他のものと重なる部分が多く、また書くのかと感じると思う。
- 移動支援を持っているのか等、こういう支援を受けているのかということが分かる。
- 先生が把握したい内容なのか。先生は福祉サービスを知っているのか。
- 支援級の先生は知っていると思う。
- 計画を立てる立場からの意見では、送迎がスムーズに行くようにという想いで作成するのならば、記載を簡単にし、サービスの内容の詳しい情報はサービス等利用計画に書けばよい。相談支援事業所は、「学校へ提出してください」という声かけをしている。
- 保護者には声かけをするが、出さないという方もおられる。
- もっと簡単に、放課後等デイサービスの部分を大きく取るほうが良いか。医療などの情報は必要か。
- 順番を入れ替えて、医療は下でも良いかと思う。
- 学校で習い事まで書いてもらうことは難しいと思う。
- 保育所としてもそれは思う。通常のお子さんでも、習い事はしているのに、なぜここまで記入する必要があるのかという意見も出るかと思う。この用紙が、デイの方との連携が上手く行くようにという目的なのであれば、ここまでは必要がないと思う。
- 大切なのは、こういうことがやりたいという意見を出して、使う側がどうすれば使いやすいかを考えること。
- この用紙を一度持ち帰ってもらって意見を頂きたい。
- これを提案していく。保護者として伝えたいことがあるかもしれない。
- 案として宝特研で意見を聞いて頂きたい。
- 個人的には習い事を知ること、こんなこともやっているのだと知ること、話が広がり、その子のことを深く知ることができるということと有意義とは思っている。「記載は自由」と一文を入れても良いのではないか。宝特研で話し合ってもらい、できるだけ早く活用できたらと思う。
- 教育委員会と相談して進めていく。

3. 全体会の講演会について

- 全体会の講演について、関西学院大学人間福祉学部の井出浩先生に依頼している。仮題は「障がいのある子どもの育ちへの支援」。11/13の全体会の後半部分となる14:45~15:45。
先生の専門は、児童精神医学。小児科の医師でもあり、子どもの発達の判定もされるとのことで、学校での関わり、保護者のかかわり、地域での支援に関してなど、絞り込んでいきたい。
- 全体会は13:30~自立支援協議会各部会の報告と講演を行う。一般の方も傍聴可能。

4. 「たからっ子ノート活用ガイドブック」について

- たからっ子ノートの使い方が分からないという声もあり、作成している。
- 本日たたき台をお配りしており、それを基に皆さんから意見を頂きたい。
- データでも利用していけるよう、エクセル版をワーキンググループで作成している。今後はデータで保存したいと思う方も増えていくと思う。
- 年度末というところが強調されているような書き方なので、年度初め（進級時）にも確認して頂けるようにした方が良い。
- 現場の先生が見て分かりやすいと感じるか教えて欲しい。
- 向きが縦横見にくいため、反対の方が良いのではないかと。
- 健診・面接時に受け取り、障害福祉課という部分があるが、3歳児健診、5歳児発達相談が正しい。また、健診は障害福祉課ではない。
- 健康推進課だが、健康推進課でたからっ子ノートを渡す機会は少ない。それまでに、必要性を説明して渡す場所としては相談支援事業所がある。
- 相談支援事業所にもノートを置いている。障害福祉課と入っているのは、相談支援の前に、障害福祉課への相談を経るという意味で書いてある。
- 3歳児健診でたからっ子ノートを見せてもらう機会はあまりない。
- 先天性の障害であれば、持っている方もいるかもしれない。
- 相談支援事業所に行く前に障害福祉課に行く。
- 障害福祉課はノートの配布場所だけでなく、関りを持つ。
- 障害福祉課と相談支援事業所は、ずっと関わるというという形で入れよう。
- ダウンロードの説明をもう少し分かりやすくして欲しい。

第4回こども部会（H30.12.13）

□全体会について報告（11/13）

専門部会の報告と講演会 の2部構成。30年度専門部会活動経過報告書参照

◆こども部会

- ・たからっ子ノート活用ガイドブックの作成、きょうだい児支援に関する講演会、放課後等デイサービスの現状などを話し合った。

◆しごと部会

- ・福祉事業所合同説明会（上半期）9月29日 悪天候の中、およそ100人が来場した。
- ・昨年度は合理的配慮について、当事者と雇用側の体験談を聞いた。今年度は合理的配慮についてフィードバックを行った。
- ・共同受注窓口が法人化された。
- ・雇用啓発セミナー（下半期）講師：有限会社奥進システム 代表取締役 奥脇学氏 『SPIS』という労務管理のソフトを作成し、従業員がその日の調子や仕事内容、他者との関りを記録し、見える化した。

◆けんり・くらし部会

地域生活Gr

ワーキング「精神保健医療福祉連携推進会議」では知的障害者の高齢化の問題、身体障害者の医療的ケアを考えている。困った時の相談先や地域で暮らす生活について話し合った。昨年は高齢者の課題シートを作成。

地域移行Gr

精神科病院からの退院について、制度に沿った地域移行を進めようと考えている。退院後の地域の資源を整理している。相談支援事業所「輪っふる」を招いて話を聞いた。

◇講演会「障害のある子どもの育ちへの支援」

講師：井出 浩氏（関西学院大学人間福祉学部教授）児童精神保健を研究されている。

自閉症スペクトラムの子どもについて、社会性や想像力が欠如する特性があるため、複雑化する世の中で集団行動を求められると、上手く適応できず自己評価が低くなり情緒的な問題も見られる。その中でどのように自己肯定感を持っていくかが課題である。子どもには社会は自分を受け受け容れてくれるという感覚が必要である。支援者が子どもを肯定的にとらえていくことが大事である。

□定例会について報告

市民福祉金について、今年度は半額支給。来年度から廃止。障害福祉基金として積み立てていく予定。

2021年度の新施設の建設を目指す。相談支援体制の強化として委託相談支援事業所を3か所から5か所に増やした。障害者就業・生活支援センターの相談員増員、グループホームのスプリングラーの設置補助金、共同受注窓口への補助も検討中。

補助犬シールを市公用車に貼り付け、普及を促している。

ファミリーランド跡地に文化芸術センター建設予定。

○子ども個人のライフステージでこれらの情報を生かしてほしい。

○身体の訓練の要望は出した。

○期待は大きい。具体的に希望を言っていきたい。

3. きょうだい児支援について

1月18日（金）講演会に向けて

○学校の先生もきょうだいまで見るのは難しい。きょうだい児のケアは福祉サービスにも乗らない。1回目にアンケートを取った時に、予想以上にきょうだい児支援のニーズが高かった。こども部会でできることとして講演会を開催することにした。

委員それぞれが所属する各部署につなげてほしい。

○年内に講演会チラシを学校に配布したい。当日は準備を手伝っていただきたいのと、講演を聴きに来ていただきたい。あいさつ・司会は部会長が担当する。

前日は午後6時から中央公民館で横断幕を外したりする準備がある。講演会が終了したら、こども部会でのきょうだい児支援の協議は一旦終えることになる。

○参加者へのアンケートが必要。次への課題を検討したい。

○きょうだい児支援について、市内で活動している団体とも課題を共有しておきたい。

2. 放課後等デイサービスの現状について

○学校から放デイへの情報共有が上手くいかず、「放課後等デイ・ほか福祉サービス利用記入用紙」を、特別支援学校が使っている「支援ネットワーク用紙」を参考に作成した。

○学校での問題意識が共通認識となっておらず、学校間で温度差がある。駐車場への入り口が子どもの出入りするところと同じ学校もあれば、入り口が別の学校もあり、広い駐車場の所もあれば、狭いところもある。宝特研の世話人会があるので、各学校での問題点を集めて宝特研に伝えた方がいい。この会で現場のニーズのアンケートを取りたい。校門を出たところでデイの車に乗ったのを勘違いし、「○○さんが連れ去られた」と訴えてきたことがあった。各学校に現状「放デイとの連携はとれていますか？」を聞いてからこども部会に返した方がよい。今日は、アンケート案を作ってきたので見てほしい。（アンケートの内容を全員で検討した。）

○こども部会では各学校と放デイとのつながりをすればいいと思う。

○先生は、支援級の子は把握できているが、普通級の子は難しい。

○支援級の子はデイの送迎の時に教師はスタッフと話ができている。

○アンケートは全先生に送るのか。

○福祉の側からすれば放デイの用紙を見れば理解できるが、学校側に理解してもらうには時間がかかる。しかし教育と福祉の連携は重要であるため、広い視野で見たい。

○車で迎える問題、「他の生徒さんに危険が及んでいないか」「デイの迎えということを先生が把握し

ているか」

- 「学校の安全」を考えると、学校が考えていくことである。①送迎について②連携について。子どもが熱を出して迎えを頼んだ時に本当に保護者かどうかわからないので、幼稚園では保護者カードを作った。
- 放デイの名称を車に付けるように放デイに義務付けることはできるか。
- 学校側はアンケートが来ると調べるので、それだけでも効果はある。
- 送迎の実態については宝特研に聞けると思う。
- (事務局でアンケート用紙のデータを預かり、文章を修正後、再び委員(教員)に送ることになった。)
- 宝特研にアンケートの文面を見せよう。

3. たからっ子ノート活用ガイドブックについて

- ほぼ完成形が出来ている。(この会でも文章の微調整をした。) ノートは就学前から大人になるまでずっと使うことができ、親亡き後も流れがわかる。理想としては学校に保管してほしい。配布の方法はどのようにするか。
- 相談支援事業所・各学校・支援級
- 委員(教育委員会): 就学説明会で説明して配る。学校から「たからっ子ノートが不足して…」と連絡があった時にノートに付けて渡す。
- ホームページからダウンロードして印刷できるようにしておく。
- 宝特研に説明し、支援級の先生に配る。(36校×3枚、メンバー120人)
- 教育委員会・各団体・各事業所、相談支援事業所(約150枚+データ送付)
- ノートと一緒に配る。(50部)
- 幼稚園もノートが足りなくなったら一緒に配る。(12園、約50部)
- たからっ子ノートの所に活用ガイドブックも載せ、ダウンロードできるようにしておく。
- 障害福祉課にもある程度置いておく。300枚程度印刷予定。来年度にカラー印刷を行う。

第5回こども部会 (H31.2.14)

1. きょうだい児支援について(報告)

- 講演会を開催し、内容も大変良く、きょうだい児支援のニーズが確かにあることがわかり、きょうだい児支援を知らない人にもつなげることができた。参加者の半数に当たる約60名の方がアンケートに協力してくれた。思いのある方が来てくれたと思う。こども部会できょうだい児支援の仕組みを立ち上げることは難しいが、今後はきょうだい児支援の新たな課題が浮かんで来たら、その時はまたこの場で話し合いたいと思っている。
- 自分も親の会の活動をしているので、個人的には市内の団体に協力をしていきたい。
成人されたきょうだいの方も来られており、どのようなサービスがあるか情報を発信していく必要性を感じた。
- 良い内容だったので皆さんにお伝えできたと思う。参加者の方から、小さい時にきょうだいは我慢してしまい、大人になっても辛い思いをしているという意見があった。日頃から私は「きょうだいはきょうだいの、障害のある方は障害のある方の人生を生きていく」と子どもに話をし、就職したらグループホームへ…という流れを作っている。親は(自分が亡くなる前に)きょうだいの方へつい「頼んだよ」と言ってしまうのかもしれない。それがきょうだいの重荷になっているのかもしれない。きょうだい児支援のテーマは今回の講演会で区切りとなるが、きょうだい児の課題が出てきたらまた話し合いたい。

2. 「たからっ子ノート活用ガイドブック」について

- 前回の部会で微調整を行い、「たからっ子ノート活用ガイドブック」が完成した。
現在、市のホームページのたからっ子ノートのところに、以前作成した2種類のチラシとともにダウンロードできるようにアップされている。
次年度に学校へ配布する保存版を印刷する。それまでは個々でダウンロードし、必要な枚数を印刷して配布してほしい。

3. 放課後等デイサービスの現状について

- 前回議論したように、放課後等デイサービスについての学校用・担任用のアンケートを作成した。集約しやすい質問数にしている。特別コーディネーターが中心になってアンケートを回答してもらうよう依頼する予定。現状では放デイの送迎時は混雑し難くなっている。駐車場の狭い学校、渋滞しやすい地域もある。まずは注意喚起から始めることになるだろう。
- 放デイの車が急に増えた。一度には敷地内に入りきらないので、小学部から順に入ってもらおう。車が多いので、担任が見ておく必要がある。毎日違うデイに行く子もいる。放デイに行く日を保護者が間違っていることもよくある。直接事業所には電話をしないのが基本。保護者に電話をかける。
- 一度に迎えに来ると大変なので、車や人に名札を付けてもらうよう周知する必要がある。
- 保護者への通知を何回も出している。名札の着用は何度も声をかけなければ、周知徹底は難しいだろう。
- 年度を跨ぐと集約が難しくなるので、3月初旬に宝特研に出し、アンケートを配布し、3月中に回収したい。放デイの迎え時の現状を大まかに把握したい。
- 学校ごとにニーズは違うかもしれない。「車と人に名札を付けて」と指示してもらえるだろうか。
- 放デイへは、教育委員会（学校教育）から障害福祉課を通して言うようになる。
- これは急ぎの件であると思う。連れ去り等を防ぐために、どこの放デイが来ているか分かるようになるだけで価値がある。
- 学校で支援者が集まって話す会議の場は持たれているか。
- 家児室がらみのケースではある。
- 今は関係者以外が学校内に立ち入ることは禁止になっている。人命にかかわることもあるので、早急に取り組みたい。

4. その他

・教育と福祉の連携

- 通学保障はニーズとして挙がってきていない。来年度、相談支援から個別ケースを出してもらい、話し合いをしたい。
- 文部科学省のホームページにトライアングルプロジェクトというのができていて、教育・福祉の連携図が掲載されている。宝塚はどうなっているのか。
- 卒業後の就労などが、上手くいっているケースとそうでないケースがある。
今まで教育と福祉との連携が少な過ぎたが、次第に、障害福祉・相談支援・社協および学校の連携が増えてきた。教育は福祉への橋渡しをしていかなければならない。
- 卒業生からの就労の相談には、「たからっ子ノート」は教育と福祉が連携する上での大きなツールになる。
- 現状では、保護者が放デイや学校、あちこちに情報共有をして回っている。学校と福祉事業所と本人・保護者がトライアングルのように連携していく必要がある。
- 相談支援では、受給者証の更新の面談の時に、「たからっ子ノートを持ってきてください」とお願いしている。子どもの時だけでなく将来就職する時に、今までどのような支援を受けてきたかが分かるため、役に立つと伝えている。

- 相談支援の連絡会で、「たからっ子ノート」は大人になってからも活用してほしい」と言ってほしい。こども部会のメンバーが変わっても「たからっ子ノート」の活用を進めていってほしい。今後、個別の案件について話し合うときも、教育と福祉の連携の話になってくると思う。今年度の協議の結果を全体会（3/22）で報告し、活動結果報告書を市のホームページにも掲載するので確認してほしい。今まであまり話し合われていない医療的ケアの必要な子ども、発達障害、精神障害などについても、今後協議できればと思う。
- STのニーズが高いが、数が少ない現状がある。言葉が出にくいことについて、訓練を受ければ改善されると思われる子どもが多い。市外までSTの療育を受けに行っている人が多い。STを増やしてほしい。
- すみれ園では保育所等訪問支援で1回はSTを利用できる。耳鼻科でSTの訓練を受けることができる。保護者の希望は多い。
- 小学校でSTに笛の練習という形で指導を受けている。育成会では「ことばの教室」を開いている。
- OSTは全国にまだ3万人しかいない。
- 訪問リハビリでSTの訓練を受けることができるが、障害福祉サービスではなく、医療の分野になる。まずは主治医に相談することになる。
- 小児科も他市になる。市内の放デイの情報はホームページに載せている。
- STが少ない、医療的ケア児の放デイが市内にない等、今後の議題にしていくことができると感じている。こども部会として市に提案していきたい。
- 医療的ケア児の放デイが少ないが、H32年度には一つ開設される予定と聞いている。また、義務教育後に普通校に行った場合、「たからっ子ノート」で連携ができるか。保護者が相談場所を知らないこともある。保護者が親の会に一步を踏み入れてほしい。まず児童発達支援に行くと、すみれ園・やまびこ学園との接点がない。
- 親の会は小学校のPTAと直に繋がっていない。親の会は「やまびこ」とは繋がりがあがる。
- 教育委員会から「親の会」をPRしてほしい。情報は色々あっても、地元の情報が入りにくいのかもしれない。
- 相談支援がいろいろな情報を持ってほしい。
- 児童虐待について、こども部会でも何らかの形で児童相談所の後押しができれば良いと思っている。

Ⅲ. 今後の展開

- ・ワーキングにて「たからっ子ノート活用ガイドブック」を作成したので、学校に配布し保存版として置いてもらい、先生方にノートの活用を依頼していく。また、学校卒業後に就労する際にもたからっ子ノートは有用なので、今後もノートの活用を進める。
- ・市ホームページ上の「たからっ子ノート」のエクセル版を使いやすく改訂したので、今後はタブレット等でも入力できるように機能を改善していく。
- ・学校で放課後等デイサービスへの子どもの引き渡しを行う時に、子どもが安全にデイへ行けるように連携を図っていく。まずは学校でアンケートを取る。放課後等デイサービスの迎えの車と職員に名札をつけるように通達を出すことを検討する。
- ・相談支援事業所が作成する計画を学校へ保護者が提出することで、学校と福祉サービス支援者が連携していく。
- ・市内にSTによる言語訓練ができる場所が少ないこと、医療的ケア児が利用できる放課後等デイサービスや短期入所の事業所が少ないこと等を議題として検討する。
- ・子どもの虐待について、児童相談所を支援するとともに、こども部会として何ができるかを検討する。